

四旬節
説教

なぜイエスは苦難を受けられたか

<ローマ6:23、マタイ20:28>



崔 和 植 牧師 (長野教会)

私たちは四旬節を過ごしていますが、この3月は忘れてはいけない出来事があります。韓国においては3・1独立運動記念日があり、ここ日本においては3・11東日本大震災があります。そして今は新型コロナ禍におかれています。この時間、そのことを覚え、主になる神に平和と癒しのために祈りましょう。

今日私たちに与えられた御言葉によって、「なぜイエスは苦難を受けられたか」について説き話したいと思います。神が苦難を受ける、それはあり得ることでしょうか。救いとは何でしょうか。すべての悪と罪、苦難から解放されることでしょうか。

イエスは私たちに救いを与えるために来られました。イエスはすべての悪と罪、苦難から解放させるために来られたのです。なのに、神であるイエスは苦難を受ける、それは不思議だと思われませんか。神だからもっと容易い方法があるでしょう。神だから苦難を受けなくても良いでしょう。

私たちのことを考えてみましょう。わたしたちはできるだけ、苦しみのない道を選ぼうとします。私たちはできるだけ、険しい道を歩かないようにします。もし、選んだ道が茨の道だったら、絶望して行かないのです。しかし、イエスはどうか。洗礼者ヨハネは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」(ヨハ1:29)と言いました。

イザヤ書53章7節も小羊について語っていますが、苦役を課せられたと語っています。まるで屠り場に引かれる小羊であると語っています。つまり、小羊であるイエスは茨の道であることを知っても、その道を歩かれたのです。あなたたちに救いを与えるために来られたイエスはなぜそんなに苦難を受けなければならなかったのでしょうか。

それについてローマの信徒への手紙6章23節は「罪が支払う報酬は死です。」と言っています。報酬は賃金ということですね。働いてもらうお金が賃金です。死が賃金であることは、罪のために働いたということです。罪のために働いたということは、いじめをしたり、騙したり、殺したり、悪いことをしたりすることだと思います。それは罪のあらゆる現象なのです。罪の本質によって現すものです。

それでは、罪の本質は何でしょうか。それは神に対して人間の正しくない態度です。人間は神によって造られた被造物です。人間は自分の意思によって、自分の力によって自ら存在する者ではないのです。創り主の神から命をいただいた存在なのです。なので、人間は自分の命のために、創り主の神に依存することが正しい態度なのです。

しかし、人間は創り主の神に頼ることよりも自分の思考、経験、力に頼って自分勝手に生きようとしたのです。まるで、自分が神様になったように行動したのです。それは自分が神様になったのではなく、本当はサタンの奴隷になってしまったのです。それによってサタンの支配下に入り、墮落してしまっただけです。結局、神から離れてしまったのです。それが、死の始まりなのです。

なので、イエスは人間の罪に対する代価を支払わなければならなかったのです。イエスは私たちがサタンから解放させるために代価を支払わなければならなかったのです。マタイによる福音書20章28節によれば、罪の代価である死のため、身代金としてイエスの命を献げたのです。それによって死の代価を支払ったのです。身代金や命を献げることは苦難を受けなければ成し遂げるものではありません。必ず、苦難が伴うのです。イエスの苦難は何でしょうか。

イザヤ預言者は「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。(イザヤ53:3)」と語っていました。

イエスがあなたたちを罪から解放するために、受けられる苦難は想像意外でした。人々はイエスを軽蔑しました。人々はイエスを見捨てました。イエスは多くの痛みを負い、病を知っていましたが、人々はイエスを軽蔑し、無視しました。

しかし、イエスの苦難はそのような人間のためでした。あなたたちのためでした。それについてガラテヤの信徒への手紙1章4節は「キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。」と具体的に書き記しています。

人間は神に対して従順にならなかったのに、イエスは神の御心に従ったのです。イエスは人々から軽蔑を受けられ、無視されたのですが、そのような人間、あなたたちを救い出そうとされたのです。そして、あなたたちの罪のためにイエスの体を献げたのです。命を献げたのです。イエスの苦難はすべてあなたたちのためでした。あなたたちに救いを与えるためでした。

その素晴らしい働きをあなたたちの心に受け止めてください。そして、イエスを信じてください。イエスがあなたたちの死や罪を支払った救い主であることに認めて感謝しながら四旬節を過ごしましょう。

韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

- B6版変型・1483ページ
- 価格:2,500円(消費税・送料込み)
- ※お求めは総会事務所へ

講壇掛・ストール販売



在日大韓基督教会ではKCCJのロゴ入り講壇掛・ストールを制作・販売しています。価格は講壇掛・ストール共4色セットで各1万円(約半額) 講壇掛・ストール両方ご購入の場合は1万5千円です。※お求めは総会事務所へ

全国女性会

第23回聖書セミナー開催

新井由貴牧師を講師にリモートで開く



2022年2月12日(土)13時から全国教会女性連合会教育局主催で第23回聖書セミナーをリモートで行った。「主に接ぎ木された者として～Withコロナ希望と癒しをもたらす教会女性」という題目で講師に新井由貴牧師をお招きして行った。参加者は112名だった。

終着点の見えないコロナ社会にあって、多くの制約に縛られる不自由な生活の中、いろいろな場面でのコミュニケーションが上手く図れなくなっている社会の変化を実感する。新井牧師任の「コミュニケーション講義」を通して、新しい視点での「伝える・話す」、「受け取る・

聴く」能力をより高め、深める時間となった。

教会における信徒同士のコミュニケーション、日常生活・職場における隣人とのコミュニケーション、そして母国を離れ異国で生活を営む私たちには、尚更のことコミュニケーションの大切さを実感した。会話の技術は勿論のこと、いつも聖霊がささえてくださることに感謝し、真心をもって相手に接する(聴き上手・分かりやすく伝える)コミュニケーションを実践できるように努力したい。
申南烈(教育局局員)



青年会全協

青年研修会を開催

日頃のルーティンについてがテーマ

2022年2月23日、全国青年会協議会(以下、全協)は、青年研修会を行った。主なテーマは、青年が行っている、日頃のルーティンについてであった。

各自、写真を準備しておき、代表から順番に自身のクリスチャンルーティンについて解説し、質問に答える形式だった。

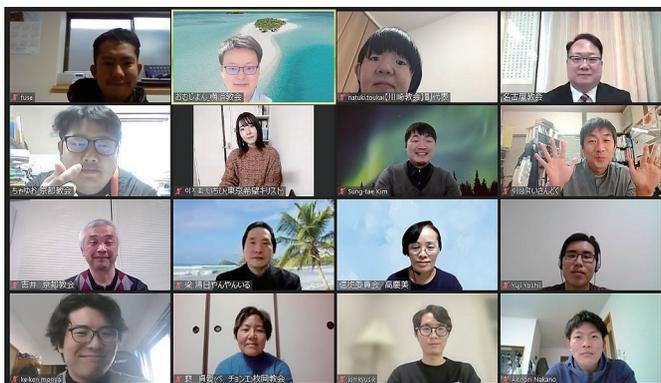
青年信徒のなかには、ルーティンについて、「今は出来ないけど今回の青年研を契機に再開したい」や「英語や韓国語でも聖書を読んでいる」、「一年で通読する目標を立てている」「家庭礼拝をしている」といった発言が上がった。

オブザーバーで参加した牧師任にも質問があり、牧師任のルーティンについても学ぶことができた。

開会礼拝は、名古屋教会、金明均牧師が担当し、閉会礼拝は、東京教会協力牧師、金聖泰牧師が担当された。

代表の発題や信徒委員長のメッセージにも有ったが、青年がコロナ禍のなかで教会に行けないなどの状況にあり、信仰が躓きやすい中で、礼拝を守ることの大切さ、信仰を確認するルーティンを共有したことは、有意義なことだったと考える。

今後とも全協を通じて、青年が、信仰に堅く立ち、人生を歩んでいくこと、全国の青年会と交流を持って仲間がいることを自覚できることは、青年の可能性と視野を広げ、青年信徒の霊的成長と育成につながり、青年自身にとっても楽しさや喜び、安心を覚える経験になると考える。これからも、全協は役員だけでなく、全国の青年信徒の力で励まし合い、信仰を育て合い、青年自身の学びの場として存続・成立させていくつもりである。



全国長老会

第1回会議をZOOMで

未自立教会の長老定年等を論議

去る1月22日(土)20:00から21:50まで全国長老会では会長の金日煥長老の働きかけによってZOOMでの会議を開いた。

まずはじめに、会長の金日煥長老は、年に6回を目安に長老会の会議を重ね、情報共有はもちろん、全国長老会の活性化を図りつつ、内外の講師を招いて総会の使命を覚えていきたいとの趣旨を説明した。

第1部の敬虔会では総会長の中江洋一牧師の使徒言行録5:12~16の御言葉により「教会は癒しの場所」と題して離れていても霊によって繋がっていることを認識することと祈りの交わりを主が支えてくださり、癒してくださるとの説教があった。

第2部は5地方会長老会の会長からそれぞれ報告を受け、関東の大宮教会の解散と関西の大阪平康教会の解散、西南の無牧教会や対馬めぐみ伝道所の祈りの課題など、各地方会の動向をシェアした。

続いて、今期の信徒委員長になった関西地方会の梁陽日長老からのアピールと、信徒委員会や女性会の活動支援、および青少年の育成への要請を受けた。

さらに全体協議では未自立教会の長老定年制の問題を考えるべきとの提案、東京教会の現状、継続課題として地方会や個教会のバランスを考えた教役者の派遣や謝儀の平準化についての提言もあった。参加者は27名だった。コロナ禍にあって私たちに力を注がれ、希望への望みをお与えになる主の恵と導きに感謝したい。

(報告:書記 申大永長老)

5地方会教会女性連合会定期大会日程

- 関東地方教会女性連合会
 - ・日時: 3月21日(月) 10:30
 - ・場所: 大阪教会
- 西部地方教会女性連合会
 - ・日時: 4月7日(木) 13:00
 - ・場所: 西新井教会
- 中部地方教会女性連合会
 - ・日時: 4月12日(火) 11:00
 - ・場所: 神戸教会
- 西南地方教会女性連合会
 - ・日時: 1年延期
 - ・場所: 豊橋教会
- 関西地方教会女性連合会
 - ・日時: 3月24日(木) 10:30

2021年クリスマス献金報告 <2022年2月16日現在>

教会	金額 (円)	教会	金額 (円)	教会	金額 (円)
三沢	14,000	京都	50,000	広島	30,000
つくば東京	7,000	大阪北部	30,000	三次	3,000
東京	50,000	大阪	303,600	西部地方会合計	147,900
東京中央	10,000	大阪築港	5,000	宇部	10,000
川崎	10,000	浪速	20,000	小倉	40,000
横浜	55,000	大阪西成	20,000	折尾	20,000
横須賀	28,000	豊中第一復興	10,000	福岡中央	5,000
関東地方会合計	174,000	堺	35,250	博多	6,000
長野	10,000	関西地方会合計	473,850	西南地方会合計	81,000
千曲ビジョン	25,700	武庫川	31,000		
豊橋	50,000	川西	10,000	合計	1,212,450
名古屋	240,000	明石	27,300		
大垣	10,000	水島	10,000		
中部地方会合計	335,700	新居浜グレース	36,600		

2022 海外韓人教会 教育と牧会大会

第13回 米国 ポートランド大会 The 13th Conference in Portland, USA

主題: 「パンデミック時代の教会教育と牧会の未来」

「エッセイの株から一つの芽が萌え出でその根から若枝が育ち」 (イザヤ 11:1)

日時: 2022年4月18-20日 17時~20時(アメリカ西部)
4月19-21日 9時~12時(韓国、日本)

場所・参加方法: 非対面 (ZOOM、要事前登録)

*日本語同時通訳があります。

参加資格: 教役者 及び 信徒

申込&登録受付 (<https://bit.ly/3hko0kd>)

- 主題講演 1 | 「北米アンケートによるパンデミック状況下の教会」
キム・ウンジュ教授 (Illiff School of Theology)
- 主題講演 2 | 「芸術と美学の回復」
ヤン・ソング教授 (George Fox University)
- 主題講演 3 | 「教育・牧会・礼拝の展望: 遊びを中心に」
キム・ナムジュン教授 (Claremont School of Theology)
- 主題講演 4 | 「パンデミック状況下での説教とは?」
キム・ウンジュ教授 (Illiff School of Theology)
- 特別講座 | 「ポスト・パンデミック、メタ教会が来る」
イ・ドンウ牧師 (Claremont School of Theology)



申込書
QRコード

主催: 海外韓人教会教育と牧会協議会
The Council on Oversea Korean Churches for Education & Ministry
参加教団: 在日大韓基督教会(KCCJ), 米国長老教会(PCUSA), 米国改革教会(RCA), 海外韓人長老会(KPCA), カナダ長老教会(PCC), 臺灣連合教会(UCA), ニュージーランド長老教会(NPC), 韓国基督教長老会(PROK), 大韓イエス教長老会(PCK),
問い合わせ: 《日本》金柄鏡 KCCJ 総幹事
《その他の国》ビョン・ゴニユル牧師 (geonyul.byeon@cst.edu)
イ・ヒョンジェ伝道師 (hyunjae.lee@cst.edu)

<公告> 2022年 総会奨学生 募集案内

総会神学生として各地方会にて認定され、1年を経過した者が申請できます。書類は総会事務局にお問い合わせください。

- 募集人員: 3 名
- 支給金額: 年額 200,000 円 / 1 人
- 支給期間: 1 年間 (受給者は、継続して新たな申請必要)
- 必要書類: ①奨学金申請書 ②在学証明書 ③成績証明書 ④履歴書 ⑤堂会長推薦書 ⑥総会神学生認定書 (各地方会試取部) ⑦各地方会長承認書
- 締め切り: 2022年4月30日必着 ※書類提出先: 総会事務局



銀座 釜めし 大統領

有限会社 エルシード
申 大 永
(東京希望キリスト教会長老)

〒104-0061
東京都中央区銀座 3-8-13
銀座三丁目ビル 1F (松屋東館うら)

t: 03-6228-6922 f: 03-6228-6923
E-mail: pino@pinocosme.com



豊かな味、豊かな心。



妻家房

SAIKABO

代表取締役 呉 永 錫 (東京希望キリスト教会 長老)

四谷本店: 東京都新宿区四谷3-10-25 Tel. 03-3354-0100

KCCJ・CCJ宣教協力委員会の公開講演会(2021年12月9日)

公開講演
連載 1

和解の主にいざなわれ、罪責をになって(1)

吉高 叶 牧師(日本NCC議長/日本バプテスト連盟市川八幡キリスト教会牧師)

1. コロナパンデミック下の宣教課題

今回、在日大韓基督教会と日本キリスト教会の宣教協約に基づく宣教協力プログラム「公開講演会」に招いていただきましたことに、心より感謝を申し上げます。

宣教協約と申しますと、両教団の宣教協約の背後には、かつての侵略戦争に加担した教会の悔い改めと、その悔い改めに基づく新たな協力関係、和解のプロセスとしての協力関係をともに歩んでいく、という理念があるのだと思います。

本日、私は「罪責」をテーマに語らせていただきますが、罪責の告白とは一度すれば終了というのではなく、罪責告白から始まる新たな歩みのプロセスがとても大切になります。私の教会が所属する日本バプテスト連盟も、戦争責任に関する告白をしましたが、それゆえに戦争責任告白をしたものとして今の生き方・姿が問われている、という点では同様です。

(1) 牧師として

私は1984年に関西学院大学神学部を卒業し、兵庫県伊丹市にあるバプテスト教会の牧師としてスタートしました。学生時代に釜ヶ崎の日雇い労働者の解放運動に出会い、また当時全国的に燃え広がっていた「指紋拒否運動」に直面し、外登法問題や入管法問題に取り組むようになりました。

1992年に東京世田谷の教会の牧師として赴任し、それと共に、外登法問題と取り組む全国キリスト教連絡協議会(外キ協)の事務局の働きを21年間担いました。また、1994年から日本キリスト教協議会(NCC)の書記を6年、続いて副議長として働かせていただきました。その間、教会を変わり、1997年から16年間、松戸市にある栗ヶ沢バプテスト教会の牧師、そのあと6年間、日本バプテスト連盟の常務理事を務め、2019年6月より市川八幡教会に赴任しました。そして、2021年3月のNCC総会において議長に選任され、再びエキュメニカル運動の「土俵」に上がらせていただくことになりました。

(2) 生命環境という「共通のコモン」

NCCの今総会期のテーマは、「神の与えてくださるすべての命を愛する者として」です。これまでの平和や人権という宣教課題はもちろんのことですが、さらに「被造物の保全」という環境課題を据え直して歩んでいきます。折しも2021年、東日本大震災から10年の節目を迎えた年ですが、大地や海洋を汚染し続ける放射能は、依然としてその途方もない負の力を私たちに突きつけています。また、私たちを苦悩の淵に追い込んだコロナパンデミックの背景には、暴走を続ける新自由主義による乱開発・生態系破壊がその原因としてあることが指摘されており、毎年のように引き起こされる異常気象・気候変動がもたらす自然災害などと合わせて、それらが人間世界に突きつけている待ったなしの警告があります。

こうした時代の文脈、生命の環境の文脈の中で、天地を創造し、命を生み、祝福なさる神の想いを知るわたしたちキリスト者こそが、この世界にあって真っ先に悔い改め、謙遜を取り戻し、「命を愛し、命を生かし、命を生きる」者として歩み直しをしなければならないでしょう。それぞれの教派や団体が、こうした生命環境という「共通のコモン」の保全のために、共に歩みを進めたいと願っています。

(3) コロナパンデミックの中での教会

私たちの社会は、昨年2020年から2年もの間、コロナ感染危機による緊急事態宣言に右往左往させられてきました。緊急事態宣言が出るか出ないか、いつ解除するのか。毎日、朝から晩までTVをつけると、感染者数・死者数が出て、今またオミクロン株。

そして教会も、対面礼拝をするかしないか。聖餐式をどうするのか。どの教会も翻弄させられ続け、礼拝維持のために時間と労力を傾注してきました。

そのような緊急事態の中、私たち教会は「緊急課題」にしっかりと向き合ってきたのかどうか、と自問自答しなければならないのではないでしょう。もちろん、礼拝の持続や維持は、教会にとって大切な課題ですが、同時にこの緊急事態の中で、「緊急課題」として、この社会の中で痛みが集中してしまった人たちに繋がる方法を求めようとしてきたらどうか、ということですね。

緊急事態宣言の中で、じつにあまりにも大きな「緊急課題」が浮上してきました。女性と子どもたちの自死は、例年の2倍になりました。コロナ危機のしわ寄せが、誰に厳しく押し寄せていたのか。

そうした中、2021年の年明けから、日本に在留している外国籍住民を強制的に国外退去させていく入管法の改悪案が国会に上程されました。名古屋入管に収容されていたウイシュマ・サンダマリさんの「虐殺」が報じられ、移住連や外キ協の呼びかけに応じて連日、市民・宗教者たちが日本の入管制度の問題を訴え、改悪を阻止すべく「国会前シット・イン行動」に取り組み、入管法改悪案を廃案にすることができました。しかし、ウイシュマさんを死に至らしめた入管法は、依然としてそのまま残っています。

2月1日にはミャンマー国軍による軍事クーデターが引き起こされ、1500人を超える人びとが国軍によって虐殺され、さらに10000人を超える人びとが身体を拘束されました。村ごと焼かれた人びとは着の身着のまま野山を逃げ回り、コロナと飢えとで、たくさんの人びとが死んでいます。ミャンマーのバプテスト指導者たちも指名手配され、今も潜伏や逃避を余儀なくされています。ミャンマー・バプテスト連盟の牧師たちのうち80名を超える人びとが殺されました。

日本国内では、在日ミャンマー人たちが帰国できなくなり、難民状態となりました。さらにビザの問題とコロナのために働くことができず、厳しい困窮状態に陥っています。就労するためには日本に来ていながら仕事がなく、生きる道を断たれてしまっている、まさに緊急事態を生きている外国人住民と、わたしたち日本の教会は繋がってきたのでしょうか。

(4) 発信であり受信である「伝道」

一方で、こうしたコロナパンデミックの中、SNSやyoutubeなどインターネットを駆使した伝道の手法が、教会に急拡大しています。それらを駆使する人たちは、「教会のピンチを教会のチャンスに」と語っています。「わたしのピンチをわたしのチャンスに。」「自分たちのピンチを自分たちのチャンスに。」……すべての矢印を自分に向けて思考する、この「思考性のおかしさ」に、私たちは気づかねばなりません。

私たち教会は「伝道」という言葉を大切にしてきました。ただし「伝道」という言葉が持っているはずの様々な出会いや分かち合いの側面、多面的な交わりの事実が、丁寧に扱われることは、稀なことです。どちらかというと、伝道は発信することであるとのみ捉え、教会のこの世での役割を「発信器」と自己理解してきました。伝道とは発信である、教会が持っている「救いの恵み」、教会にすでに与えられている「救いの鍵」、それをこの世の人びとに発信しなければならない。「救いに関する言説・論理」はすでにこちらが決めて持っていて、それを発信する。そして今回は、「インターネットやSNSによって配信するという『発信手段』を開拓できた」と喜んでいるのです。

しかし、教会はもっと「受信すること」、いま、この時代の人びとの痛みを受信する「受信器」として、あるいは教会に先立ってこの世で働いているキリストの業を受信する「受信器」として自己理解する、そのような思考と認識へと転換しなければならないのではないでしょう。教会が地域に存在している事実、教会が地域社会と同様に高齢化し、また教勢的にも小さくなっていることを「受信器」として自己理解する、積極的に捉え直すことが大切ではないでしょうか。